

寄稿論文

米蔵（ヨネゾウ）風 60 分足分析手法

株式会社フジトミ 米蔵塾
塾長 米倉 教公

1. はじめに

今回米蔵風分析の第2弾として『米蔵風 60 分足分析手法』ということで筆をとった。投資初心者向けに書いているので、ベテランの投資家には物足りなさがあるかもしれないが、ひとつでも『キズキ』があれば大いに使って頂きたい。まず、投資を初めて間もない投資家は、日足を中心に相場を見ていることが多いと思う。そのため、ポジションが逆行した時にストップロス金額が大きくなり過ぎて、ポジションが切れなくなる。挙句の果てにポジションを持ち越すことで、最終的には多大なロスが出てしまい市場から退場を余儀なくされる投資家が多い。かといって、5分足や15分足など超短期の足では、せっかくトレンドに乗っているのに早く利益をとり過ぎて、その後もトレンドが続き利益を取り損なった経験を持つ投資家も多いと思う。

そこで、何分足、何時間足を使えば良いのか試してみた。『米蔵風一目均衡表の考え方』^{注1)}でも書いたが、私的には基本的に4の倍数となる分足を

●プロフィール

米倉 教公

短資会社、外資系銀行、国内銀行、外資系投資運用会社、国内証券会社などでFX・スワップ・国内外債券・株式・商品などディーラー、ファンドマネージャー、法人・個人営業等を経験し、その経験を活かし誰にでも分かりやすい経済・金融の講師となる。ディーラー、ファンドマネージャー時代にはレコード塗り替える収益パフォーマンスの実績を残す。現在は、(株)フジトミを中心に今までの経験を活かし、FX、株、商品等、あらゆる金融商品に関するテクニカル分析や投資手法に関するセミナー講師や市場コメントの執筆活動をしている。1984年東海大学政治経済学部卒



時間足を推奨する。それは、地球が1度緯度が変化するのに4分(24時間×60分=1,440分、1,440分÷360度=4分)かかる。我々は地球上で取引していることから、地球の回転と共に人間の心理にも影響するという考えからだ。例えば、一般の人間では集中力は50分～60分と言われているように、何かの変化が生じていることになる。60分は4分の15倍の長さになることで15度緯度が動いたことになる。また、240分足が良いという投資家もいるが、ちょうど60度緯度が変化したことになる。しかし、何の根拠があるのかと聞かれても、科学的に実験したわけではないので残念ながら証明はできない。ただ、色々試してみると60分足がある程度トレンドが取れ、なお且つトレンド変化によるストップロスも早く出せることで60分足を多用している。日足の動きを24分割することで、早くトレンドの変化が掴めることになる。要するに『ストップロスは早く』、『トレンドは出来るだけ大きく取る』方法として今回紹介する。

初心者ほど人のトレードの良い所は盗んで、自分なりに使いやすいように工夫することをお勧めする。『職人は一日にしてならず』、上手い職人技を盗んで自分なりに工夫した職人こそが『匠』と言われる一流の職人となる。だから、これから紹介するトレード方法を最初は100%真似するのも良い。しかし、そこからトレードしながら自分なりの工夫をして、勝率・利益率をあげることで自分なりの投資手法を『開眼』することが大事だ。

注1 テクニカル アナリスト ジャーナル 2015 Vol.2 に米蔵風分析第1弾として掲載

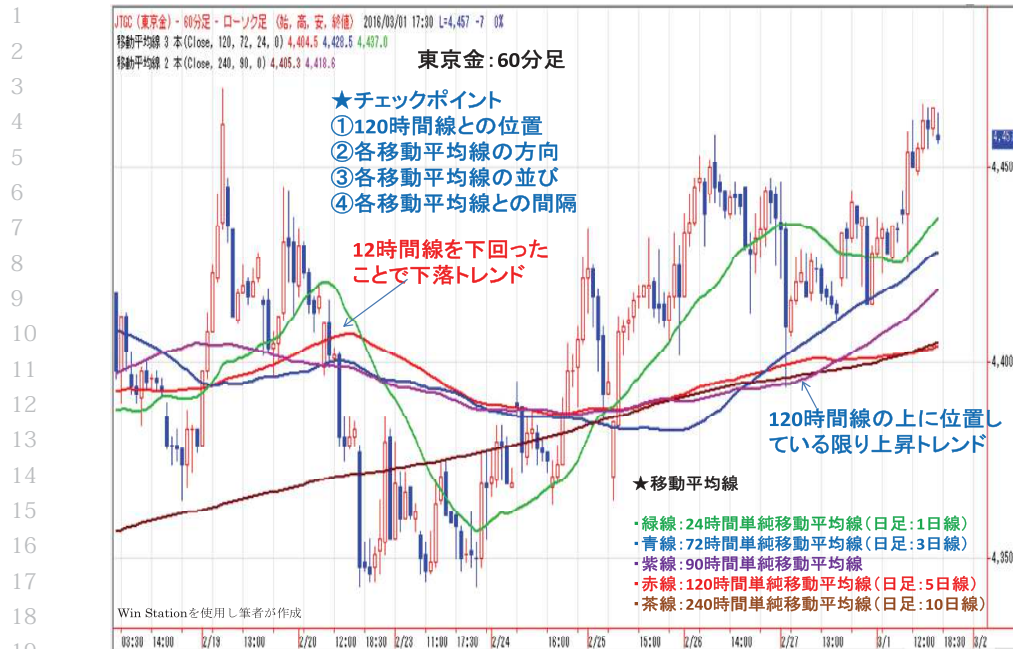
ところで、利益率を上げきちとストップロスが入れられないと、勝率で99勝しても1敗で全てを失うことになる。そのため、勝率よりも利益率に拘ってもらいたい。我々は機械ではないので、ストップロスする時は誰でも悔しく、自己嫌悪感湧いてくる。ただ、繰り返しになるが99勝しても1敗が命取りになることもある。また、100%儲かった投資家は少ない。昨今では色々な手法を使うヘッジファンドも現れているが、そのヘッジファンドだって破綻するところが多いくらいだ。せっかく投資に興味をもって始めたトレードで、早々に市場から退場するのは不幸である。そのため、少しでも私の手法が役立てばと思って執筆した。

前置きが長くなったのでそろそろ本題に入る。

2. 日足の移動平均線の活用

まず、テクニカル分析の基本では、日足で5日移動平均線を上回っていると上昇トレンド、下回ると下降トレンドとされている。誰でも知っていることだが、この5日線を基本として考える。5日線を60分足に換算すると120時間線となる。次に日足1日線の24時間線を入れる。24時間線の上であれば日足では陽線、24時間線の下であれば陰線というイメージが掴める。3日線は72時間線として入れる。24時間線と120時間線の間隔的な流れを掴む。5日線の倍となる10日線の240時間線を入れる。これは5日線を上抜け・下抜けした際に10日線まで下回るのか、それとも上回っているのかト





レンドの強さを掴む。さらに、90 時間線を入れる。これは昔からドル / 円を見て行く上ではかなり有効な移動平均線で 90 時間線を上回ると上昇トレンドを維持する。一方で下回ると下降トレンドを維持することが多々あり、私的には非常に重要な移動平均線となる。これで下（次ページ）のチャートが完成する。

★重要チェックポイント

- ① 120 時間線の上にあるのか、それとも下にあるのか確認
- 120 時間線は日足では 5 日線に当たる。そのため、5 日線の上であれば上昇基調となるが、5 日線を下回ってくると下落基調となる。
- ② 各移動平均線の方向が上向きか・下向きか確認
- 短期線が上向きでも中長期線が下向きなら本格的な上昇トレンドとはなっていないので、上値抵抗ラインとなることがあるので注意。逆に短期線が下向きでも中長期線が上向きなら下値支持ラインとなることがあるので注意。
- ③ 短期線・中期線・長期線の順番
- 基本的なことだが、上昇トレンドなら短期・中期・

長期線の順番となる。また下落トレンドなら長期・中期・短期線の順番になる。

④ 各移動平均線間の幅

各移動平均線との幅が広がっているなら、上昇・下降トレンドの勢いがある。一方で各移動平均線との幅が縮小しているならトレンドの勢いが鈍化したことになる。

★トレード方法

120 時間線の上にあるのか、下にあるのかを確認する。移動平均線の上にある場合は各移動平均線で下値支持ラインとなり反発したところで買い。上昇トレンドが継続していることから売りは見送る。また、移動平均線の下にある場合は、各移動平均線が上値抵抗ラインとなったら売り。下落トレンドが継続していることから買いは見送る。

★ストップロスのポイント

買いなら 120 時間線を下回ったところでストップロス、売りなら 120 時間線を上回ったらストップロスが基本。

★デメリット

トレード回数が少ないことや、どこで利益確定すれば良いかロウソク足の動きだけに頼ることになる。そのため、次のセクションでは一目均衡表の雲を挿入する。

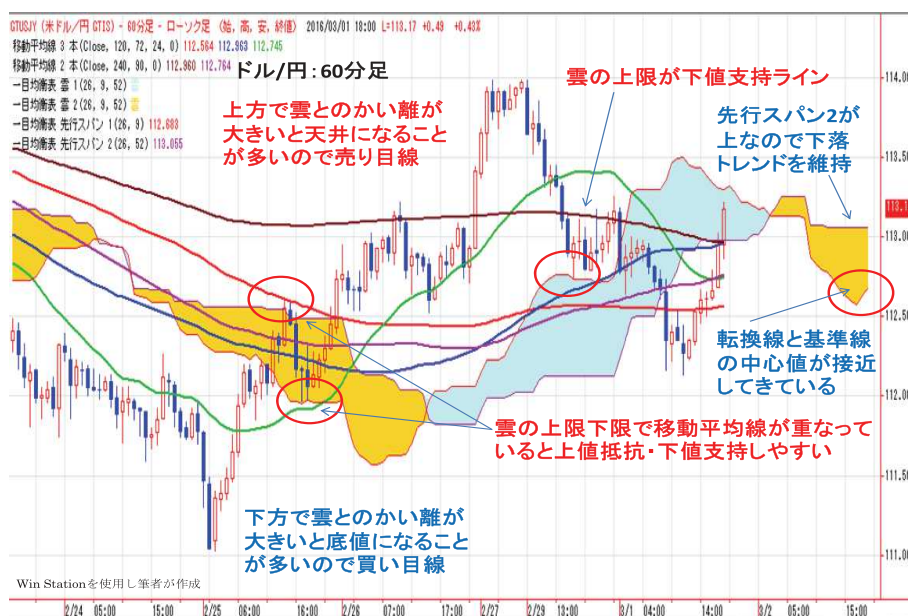
3. 一目均衡表の雲を設定

一目均衡表の雲を設定することで、雲の上限や下限が上値抵抗・下値支持ラインとなることが多く、移動平均線だけでは分からなかった抵抗ラインが見えてくる。雲の上抜け・雲の下抜けでトレンドの強さが分かる。雲の上抜けなら今後の上昇相場に備える。また、下抜けなら下落相場に備える。

そして、雲のネジレでは、トレンドの反転やトレンドの加速が生じることが多いことから、変化に対応する準備をする。そして、雲の厚みにも注意が必要だ。雲が厚いということは、過去26期間での売買が多かったことを意味し、雲の上抜け下抜けしにくく雲の中の移動平均線で反転することがある。また、雲が薄い場合はあっさり上抜け下抜けすることがある。さらに、26期間先の先行スパン1と2で先行スパン1が上ならば上昇トレンド、先行スパン2が上ならば下降トレンドとみる。また、26期間先の先行スパン1と2のネジレがあれば、上昇トレンドなら下落トレンドに、下落トレンドなら上昇トレンドに反転したことが判断できる。先行スパン1が上向き・下向きの変化で転換線と基準値の中心値が上向き・下向きとなっていることが判断できるほか、先行スパン2の上向き・下向きで52期間の中心値の変化も判断できる。

雲と移動平均線の関係では、雲の上下限に移動平均線が掛っているときは、上値抵抗・下値支持ラインとなるかを確認する。雲と価格のかい離は感覚的なものになるが、上方にかい離が大きい場合は、天井に近い可能性があり、売り目線で見て行く。また、下方にかい離が大きい場合は底値となる可能性があり、買い目線で見て行く。

雲と移動平均線の関係では、雲の上下限に移動平均線が掛っているときは、上値抵抗・下値支持ラインとなるかを確認する。雲と価格のかい離は感覚的なものになるが、上方にかい離が大きい場合は、天井に近い可能性があり、売り目線で見て行く。また、下方にかい離が大きい場合は底値となる可能性があり、買い目線で見て行く。





一目均衡表の雲を設定しただけで、これだけの情報量が増えることになり、トレードする時の参考となる。

移動平均線に一目均衡表の雲を設定すると下のチャートになる。

★重要チェックポイント

①移動平均線だけでは分からなかった抵抗ラインが見えてくる。

雲の上限や下限が上値抵抗・下値支持ラインとなることが多い。

②雲の上限上抜け・下抜けでトレンドの強さが分かる。

雲の上限を上抜けなら上昇相場に備える、雲の下限を下抜けなら下落相場に備える。

③雲のネジレで反転・加速。

雲のネジレでは、トレンドの反転やトレンドの加速が生じることが多いことから、変化に対応する準備をする。

④雲の厚みで上抜け・下抜けの難易度を知る。

雲が厚いということは、過去26期間での売買が多かったことを意味し、雲の上抜け下抜けの難易度が分かる。また、雲の中の移動平均線で反転する可

能性を知る。

⑤26期間先の先行スパンの位置でトレンドを知る。

先行スパン1が上ならば上昇トレンド、先行スパン2が上なら下落トレンドと見る。

⑥26期間先のネジレでトレンドの転換を知る。

ネジレで先行スパン1と2が逆転することとなり、上昇トレンドから下落トレンドへ、下落トレンドから上昇トレンドに反転したことが分かる。

⑦先行スパンの方向で転換線と基準線、52期間の中心値の移動が分かる。

先行スパン1が上向き・下向きの変化で転換線・基準線の中心値の変化が分かる。また先行スパン2の上向き・下向きで52期間の中心値の変化も分かる。

⑧雲と移動平均線との関係。

雲の上下限に移動平均線が掛っているときは、上値抵抗・下値支持ラインとなることがある。

⑨雲と価格のかい離。

雲と価格の間のかい離が上方に大きい場合は、天井に近い可能性があり、売り目線で見て行く。また、下方にかい離が大きい場合は底値となる可能性があり、買い目線で見て行く。

★トレード方法

基本的には、価格が雲の上で推移しているのか、それとも下で推移しているかで、大きなトレンドを探っていく。雲の上限を上抜けしたばかりならば買いから入る。また、下抜けしたばかりならば売りから入る。雲のネジレが近くにあるかを確認する。ネジレでは反転・加速などトレンドが変化することが多いので、ネジレ付近では注意する。26 期間先の先行スパン 1・2 の位置関係や方向を確認し、先行スパン 1 が上なら買い目線、先行スパン 2 が上なら売り目線で相場を見る。ロウソク足と雲との位置関係も重要で、上方に大きくかい離していたら上昇していても反転時期を探す売り目線。また、下方に大きくかい離していたら下落していても反転時期を探す買い目線で見て行く。

★ストップロスのポイント

雲の上下限を上抜け下抜けしたが、再び雲の中に戻るような場合は、元のトレンドに戻った可能性が高いことから早目にストップロスを入れる。

★デメリット

移動平均線と一目均衡表の雲だけでは、相場の過熱感が分かりにくく、ロウソク足の形や移動平均線を上抜け・下抜けするまで利益確定が遅れる。

4. オシレータの MACD を設定

MACD は『Moving Average Convergence and Divergence』の頭文字を並べたもので『マックディー』と呼ばれている。日本語では『移動平均収束発散法』と呼ぶのが一般的である。この手法は、期間の異なる 2 本の移動平均線の価格差（ギャップ）の伸縮に注目し、その動きによってトレンドの

方向性および転換の兆候を把握しようというものである。価格がトレンドを形成しながら上昇または下降する時、それに追隨してまず短期の移動平均線が動き、遅れて長期の移動平均線が動く、この際、両者の感応度の違いによりギャップが拡大する。したがって、上昇トレンドの序盤から圏内で推移する。下降トレンドはその逆となる。

MACD のパラメータの設定は、① 12、26、9 が一般的であるが、② 5、20、9 や③ 10、20、10 という設定方法もある。どのように選べば良いかというと、チャートに MACD を設定した時に出来るだけダマシが少ないものを選ぶことが重要だ。また、①と②ではゴールデンクロスやデットクロスの位置が①より②の方が早くシグナルを出す。しかし、②はその分ダマシが増える欠点がある。③に関しては東京金と相性の良いパラメータになっている。投資商品別に自分でパラメータを変えてみることも有効だ。

MACD は大きく上昇した後の反転下落時や大きく下落した後の反転上昇時など大きなトレンドからの反転時には非常に有効なオシレータとなる。また、上方から MACD とシグナルがゼロラインの上方・下方からゴールデンクロス・デットクロスしてゼロラインまで来た時に、ゼロラインが抵抗ラインとなることもある。投資初心者がゴールデンクロスやデットクロスが継続すると思い、トレードをしてゼロラインで反転してしまつて失敗するのも、このゼロラインリバーサルによるものだ。MACD はトレンドが出ている時は特性を発揮するが、もみ合い相場になると一気にダマシが多発する。また、ゼロラインではもみ合い相場となることも多く、売買タイミングがまったく掴めなくなる。MACD とゼロラインが出来るだけ大きくかい離した時を待ってトレードすると失敗も少ない。



★重要チェックポイント

①ゼロラインとの距離。
 ゴールデンクロスやデットクロスの信頼度はゼロラインからのかい離が大きいほど信頼度が高くなる。ゼロライン近辺でのクロスはダマシとなることが多い。

②もみ合い相場ではダマシが増える。
 MACDの最大の欠点は、もみ合い相場ではゴールデンクロス・デットクロスが頻発することが多くなる。

③ゼロラインが上値抵抗・下値支持することがある。
 ゴールデンクロスやデットクロスのトレンドに乗っていても、ゼロラインが抵抗ラインとなって反転することがある。

④過熱感を表すオシレータとの併用。
 ダマシを減らすには、過熱感を示現するオシレータの併用が重要となる。例えばストキャスティクス・スローやRSIなどの併用が重要だ。

★トレード方法

出来るだけゼロラインからかい離した時点でのゴールデンクロスやデットクロス時にトレードするのが重要となる。特にゼロライン近辺ではもみ合い相場となり、トレンドが出ず、ダマシが多発するので注意が必要となる。また、トレンドに変化が出てくると、MACDとシグナルのかい離が縮小してくる。要するにトレンドに変化が現れてる初動となるのでかい離幅を注意深くみていく。

★ストップロスのポイント

基本的には買いの場合はゴールデンクロスした後、再びデットクロスした際となる。また、売りの場合はデットクロスした後、再びゴールデンクロスした際となる。基本的にはというのは、MACDはダマシが多いオシレータであるため、他の要因も見ながらストップロスを決めて行く。

★デメリット

もみ合い相場となった時や、ゼロライン近辺ではダマシが多く頻発する特徴がある。

5. オシレータのストキャスティクスローを設定

ストキャスティクス (Stochastic) は価格の終値の位置と定められた日数の価格範囲を比較するモメンタムオシレータのことをいう。この分析手法は、価格が上昇するにつれて、終値が価格変動幅の上限に近づくとの観測に基づいており、逆に相場の下落局面では、終値は変動幅の下限に近づくというものである。ストキャスティクスには、動きの速い『ファースト』と動きを緩くした『スロー』の2つがある。今回はストキャスティクス・スローを使用する。%Kと%Dと名付けられた2本のラインから構成されていて、%Dは%Kの平均線である。ストキャスティクスの意味するところは、一定期間の価格レンジの中で直近の終値が相対的にどのレベルに位置するかを見ることにある。スローでは敏感な%Kラインは使用せず、本来の%Dをもって新しい%Kラインの代わりをする。そして、この%Kラインの3日間の移動平均線を新たな%Dとする。パラメータは一般的には、①5、3、3を使用するが、ここでは②14、3、3を使用する。また、ある程度大きなトレンド狙いなら、③42、3、3なども使用することもある。

★重要チェックポイント

①%Kと%Dの水準から判断する。
 一般的には0%に近づけば売られ過ぎ、100%に近づけば買われ過ぎと判断される。
 したがって、20%以下では売られ過ぎ圏、80%以上では買われ過ぎ圏となる。

②ゴールデンクロスとデットクロス。
 20%以下で%Kが%Dを下から上抜けた時点や80%以上で%Kが%Dを下抜けた時点を売買シグナルとする。また過熱圏まで到達していなくても、%Kと%Dのクロスをもって売買シグナルとする。ただ、その場合は、ダマシとなることも多くなる。

③ダイバージェンスとコンバージェンス。
 ダイバージェンスは、価格が高値を更新しているにもかかわらず、オシレータが前回の高値を超えられない場合は、価格が近く反落するシグナルとな

る。また、コンバージェンスは、価格が安値を更新しているにもかかわらず、オシレータが前回の安値を下回ってこない場合は、価格が反転するシグナルとなる。

★トレード方法

出来るだけ売られ過ぎとなる 20% 以下圏や買われ過ぎとなる 80% 以上圏からゴールデンクロスやデットクロスしたうえで、20% ラインや 80% ラインを上抜け・下抜けしてきたところを売買タイミングとする。行き過ぎ圏に至らずもゴールデンクロス・デットクロスした場合は、他の要因を加味して売買する。また、ダイバージェンスやコンバージェンスは、特に安値圏や高値圏で発生する。

★ストップロスのポイント

売られ過ぎや買われ過ぎから一旦上抜け・下抜けしたものの再び % K が反転した場合は、価格調整が終了してトレンドが再び強まる可能性を示唆しているので、反転のデットクロス・ゴールデンクロスしたところとなる。

★デメリット

価格の動きが明確な上昇・下落トレンドを描いている場合には、ダマシが発生しやすい。明確な上昇トレンドが形成されている場合、売りシグナルが、実は押し目買いになってしまうことや、わずかな調整のあと高値を更新する場合がある。反対に、明確な下落トレンドが形成されている場合、買いシグナルが戻り売りタイミングとなってしまう、再度安値を更新する場合などもある。

6. MACD のゼロラインリバーサル戦略

MACD とストキャスティクス・スローの相性が良いのは、MACD のデメリットとなるもみ合い相場に弱い点をストキャスティクス・スローがカバーする。また、ストキャスティクス・スローのデメリットであるトレンド時の弱い点を MACD がカバーす

るからである。この組み合わせによって、もみ合い時・トレンド時のどちらでもカバーできるからに他ならない。

MACD のところで、ゼロラインが上値抵抗・下値支持ラインとなることに触れたが、その見極めはストキャスティクス・スローとの組み合わせによって見分けることができる。MACD だけでは、ゼロラインが抵抗ラインとなるかが分かり難く、ゴールデンクロス・デットクロスのトレンドに乗れたとしても、抵抗ラインとなるか判断出来ずに最大利益を損ねてしまうのでは、非常につまらない。

★トレード方法

いたって簡単に見極めができる。まず、MACD がゼロラインの下方から MACD とシグナルがゴールデンクロスし、ゼロラインに向かって上昇してきたとする。その際、ストキャスティクス・スローが、どの位置にあるかが重要となる。% K と % D が 80% を超え買われ過ぎまで上昇していて、上方で % K と % D がデットクロスしていると、MACD はゼロラインが上値抵抗ラインとなる可能性が非常に高い。一方で、MACD がゼロラインの上方から MACD とシグナルがデットクロスし、ゼロラインに向かって下降してきたとする。その際、% K と % D が 20% 以下で売られ過ぎまで下降していて、% K と % D がゴールデンクロスしていると、MACD はゼロラインが下値支持ラインとなる可能性が非常に高い。

東京ゴムの日足チャートでは、MACD がゼロラインの下方から上昇してきたものの、ストキャスティクス・スローが買われ過ぎ圏である 80% から % K と % D がデットクロスしたことからゼロラインが上値抵抗ラインとなり、下落したケースが 2 度ある。また、ゼロラインの上方からゼロラインに向かって下降したものの、ストキャスティクス・スローが売られ過ぎ圏である 20% から % K と % D がゴールデンクロスしたことからゼロラインが下値支持ラインとなり、上昇したケースが 1 度ある。



豪ドル / 円の日足でも同様の現象が起きている。
MACD のゼロラインリバーサルは頻発するわけで

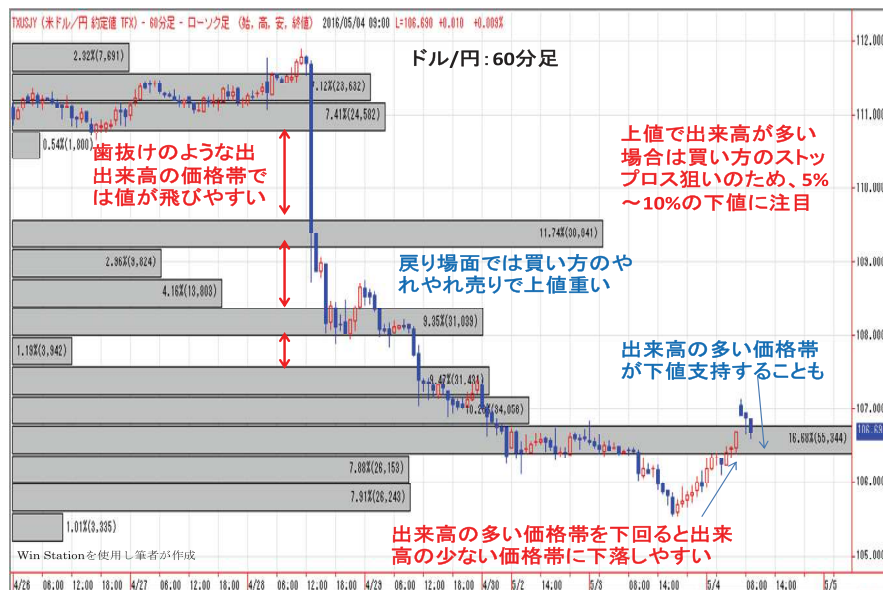
はないが、このタイミングを上手く捉えるとそれなりのパフォーマンスが挙がる。

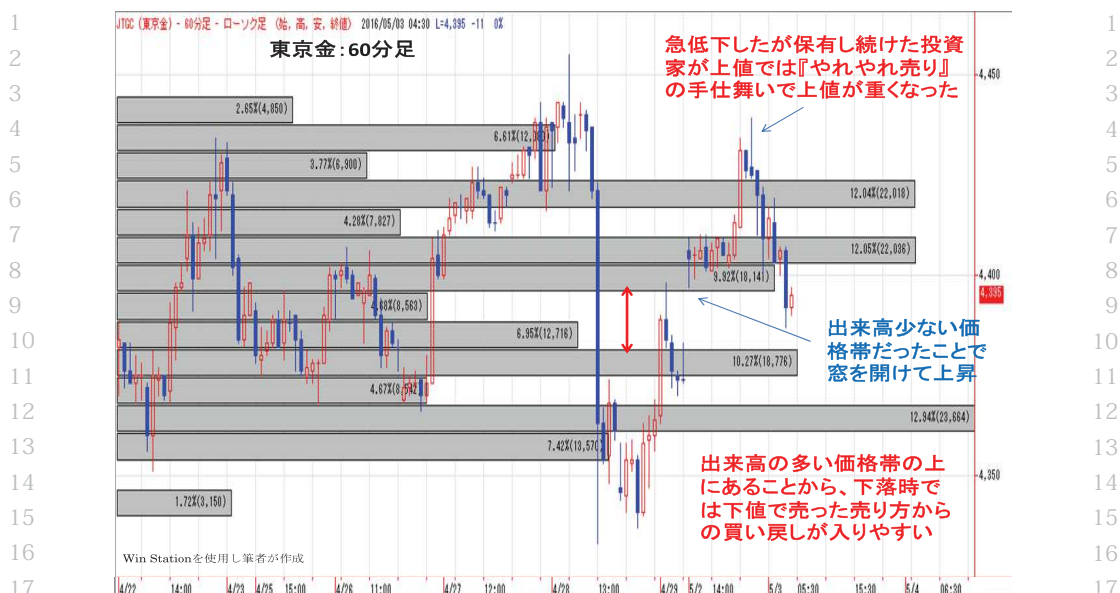


7. 価格帯別出来高を設定

価格帯別出来高は日足や週足では、中長期間の価格帯で表されるため現在の様な短期トレードを中心とした市場では合わないと言われている。しかし、60分足の場合は、7営業日前後の取引期間内での価格帯別出来高となるため有効性が高い。特に商品先物や株先物及び為替市場では、買い持ち・売り持ちしている投資家がいるので、現物市場中心の株式市場よりも利用性が高い。価格帯別出来高は一般的には、出来高の多い価格帯を上抜け・下抜けすると出来高の少ない方に価格が進むと言われている。また、価格帯別出来高の多い価格帯では上値抵抗・下値支持ラインとなることも多い。これは、一旦含み損を抱えた買い方や売り方からの『やれやれ取引』が入りやすいからである。投資家心理とすれば、一

旦含み損を抱えると損益トントンまで戻してくると仕切り直したくなる心理状態に置かれるからである。そして、価格帯別出来高で出来高が少ない歯抜けのような価格帯では真空状態となっていて、上下に値が飛びやすいのも特徴だ。さらに、価格帯別出来高では、ストップロスの重要性が昨今言われていることから、投資家は出来高が多い価格帯から5%～10%程度上下すると、ストップロスの手仕舞いトレードを入れてくる可能性が高い。そのため、順張りでもトレードに乗って、ストップロスを巻き込んだ大きな動きに乗れる可能性が高まる。為替などでは、プロファイルチャート図を使う投資家が多いが、価格帯別出来高とロウソク足の流れを見ていと同様の効果があり、価格帯別出来高のなかでどのように価格が移動したか分析できる。





★重要チェックポイント

①来高の多い価格帯。

出来高が多い価格帯を上抜け・下抜けすると出来高の少ない価格帯に進む。

②出来高の多い価格帯では、上値抵抗ラインや下値支持ライン。

出来高の多い価格帯の上下に一旦動いたものの、反転して戻ってきた際に上値抵抗ラインや下値支持ラインになりやすい。これは、買い方なら『やれやれ売り』や売り方なら『やれやれの買い戻し』が入りやすいからである。

③歯抜けのような価格帯は値が飛びやすい。

出来高の多い価格帯に挟まれ、極端に出来高が少ない価格帯では値が飛びやすい。そのため、出来高が少ない価格帯に入る前に順張りでトレンドに乗る手法もある。

④出来高の多い価格帯からのかい離率。

昨今ではストップロスの重要さが言われていることから、投資家もストップロスを入れてくることが多くなった。そのため、出来高の多い価格帯から5%～10%上下でストップロス狙いという方法もある。

⑤価格帯別出来高の中を価格がどのように動いたか分析。

プロフィールチャート図を使う投資家が多いが、価格帯別出来高とロウソク足の流れを見ていると同様の効果があり、価格帯別出来高のなかでどのように価格が移動したか分析できる。

★トレード方法

基本的には、価格帯別出来高だけで取引することではなく、移動平均線や一目均衡表、オシレータなどを合わせ見てトレードすることになる。しかし、上下にトレンドが出ている場合などは、ストップロス狙いのトレードには役立つ。また、他の指標と合わせて上値抵抗ラインや下値支持ラインと価格帯別出来高の出来高の多い価格帯と重なっているときは抵抗ラインとなりやすい。

★ストップロス

買い持ちなら出来高の多い価格帯を下抜けした場合、売り持ちなら出来高の多い価格帯を上抜けした場合はストップロスとする。出来高が多い価格帯を抜けるということは、他の投資家のストップロスが入りやすくなり、巻き込まれると大きな含み損を抱

えてしまうことになる。

★デメリット

単独でのトレードが困難なことや、価格帯別出来高をチャート上に出すと、移動平均線などが見えにくくなることである。

8. チャート分析例

例1 ではドル / 円の 60 分足 (2016 年 4 月 28 日～5 月 4 日 AM10:40) のチャートを使用する。

この時のドル / 円は、120 時間線 (赤: 日足で 5 日線) が下向きであり、価格が 120 時間線の下に位置していることから下落トレンドの戻り局面となっている。また、一目均衡表の雲の上限が上値抵抗ラインとなっている。ただ、26 期間先の先行スパンでは、先行スパン 1 が上に先行スパン 2 が下にありドル高傾向のあることを示している。

価格帯別出来高は、この間の出来高の多い価格帯

にある。そのため、戻り局面では 4 月 29 日以降にドル買いした買い方から『やれやれ売り』が出やすく上値が重くなりやすい。ただし、もう一段のドル高では安値で売っていた売り方からのストップロスの買い戻しも入りやすくなる。

MACD ではゼロライン近辺に位置していることや、MACD とシグナルが上向きではあるが、かい離幅を広げる勢いのある上昇ではないことから、ゼロライン近辺でダマシとなる可能性もある。それは、ストキャスティクス・スローが、一旦過熱感がある 80% 域から下落傾向にあったが、再び % K と % D が上限でゴールデンクロスするかが焦点となる。しかし、下から突き上げるような上昇となるには高値圏にあり、戻りも限定的となる。

今後の注目点とすれば、出来高の多い価格帯にある雲の上限を上抜け出来るかにあるが、120 時間線を下回っているうちは目下線での戻り待ちとなる。また、上抜けしてきても、ストキャスティクス・スローに過熱感が出やすい。早めのストップロスは雲の上限を上抜けしたところ。粘って 120 時間線





の若干上あたりに置きたい。

例2では東京金60分足(2016年4月23日～5月3日終了時)のチャートを使用する。

この時の東京金60分足は、大幅下落後の戻り基調であったが、上ヒゲを付けて下落基調となっている。上値は120時間線、90時間線、72時間線、24時間線及び出来高の多い価格帯が上値抵抗ラインとなっている。ただ、一旦雲の中に入ったものの、雲の下限が下値支持ラインとなり、雲の上限から僅かに上抜けして引けている。各移動平均線が上値を抑えている。ただ、26期間先の先行スパンでは、先行スパン1が上にあり先行スパン2が下にあることや、240時間線が上向きを維持していることで上昇基調は継続している。

価格帯別出来高では、出来高が多い価格帯に挟まれ、歯抜けのような価格帯に位置している。そのため、下に値が飛びやすいことになる。

MACDはゼロラインの上方からデットクロスして下向きとなっている。MACDとシグナルがかい離を広げている。一方ストキャスティクス・スローは売られ過ぎとなる20%域の下で推移している。この場合は、現在は下落トレンドとなっていること

からトレンドに強いMACDを優先的に見ていく。

今後の注目点では、出来高の多い価格帯や各移動平均線を上抜けすると、120時間線(日足では5日線)を上抜けしたこととなるので、下落トレンドから上昇トレンドに戻る可能性が高まる。上抜け出来ない場合は、出来高の少ない価格帯にあるため、下に値が飛びやすくなるが、雲の下限が下値支持ラインとなるかに注目。また、下の出来高の価格帯に240時間線(日足では10日線)があり、下値支持ラインとなるかも注目点となる。この段階では、どちらに抜けるかを見極めるまでは様子見スタンスとなる。

9. 最後に

今回題材にした60分足の趣旨は、手遅れになる前にストップロスを入れられるということにある。日足ではロスが大きくなってしまっていて、初心者がトレードを手仕舞えないでいると投資したが直ぐに退場ということになりかねない。そのために、チャートを細分化しつつ、チャート上にシグナルを多くしている。また、5分足や15分足では、ストップロスは早くても、折角トレンドに乗っていても早く手

1 仕舞いやすく、大きなトレンドが取りにくい。その
2 ため、ストップロスも遅くなり過ぎず、ある程度ト
3 レンドで収益を伸ばせる 60 分足を選んだ。

4
5 トレードにおいて絶対に勝てる手法というものは
6 存在しない。そのため、トレードには必ずミスが発
7 生する。そのミスを少なくすることが重要である。
8 そして、ミスをしたら、リセットする勇気と実行力
9 が重要となる。

10 冒頭にも書いたが、初心者ほど人のトレードの良

い所は盗んで、自分なりに使いやすいように工夫す
ることをお勧めする。『職人は一日にしてならず』、
上手い職人技を盗んで自分なりに工夫した職人こそ
が『匠』と言われる一流の職人となる。

みなさんのご健闘をお祈りする。

<参考資料>

・『日本テクニカル分析大全』日本テクニカル協会
編 日本経済新聞出版社